

# 「多元的共生社会を教育から考える」

異文化や様々な格差が混在せざるを得ない多元的共生社会をどう生きるか。荻宿俊文教授が投げかけた、本シンポジウム第1回から継続するテーマである。多文化共生はEUの挑戦でもあったが、あまりにも大量の難民・移民によって、イギリスやドイツでもシステム不全に陥ったとのニュースが伝えられる。アメリカのトランプ大統領は、メキシコとの国境封鎖やイスラム教徒の入国制限を公約に掲げて当選した。多元的共生社会は完全に挫折したのか、それとも道半ばなのか。多元社会の不可避性と共生社会の不可能性を、今回は教育の視点から、社会にとって教育がどうあるべきかを議論・検討してもらおう機会となった。

「知らずに悩むより知って考えよう。知るためには、いろんな人とアンテナを共有し合ったほうが知識が深まる」と。

## ■ ポジションを得ることが教育の目的か

議論の資料として2つ映像が流された。イギリスで、イスラム圏からの移民・難民がイギリスの歴史や文化を学び、難しい試験にチャレンジして市民権を得ようとしている映像。移民タウンを抑制し、イギリスの良き市民になることを目的とした市民教育だ。もう一つはテレビドラマで、進学校ではない高校に赴任した教師が、「君たちが社会や企業に必要とされるには、人間力

を育むしかない」と論ずシーン。

映像を踏まえて荻宿氏は問う。「良き市民として社会にポジションを得ること、生きていくために人に必要とされる人間になることは、本音の部分としてはあるけれども、教育の目的がそれであっていいのか」

## ■ 情報社会と自己責任

現代のような情報社会では、個別化された便利なサービスを受けられる一方で、個人が自己責任で判断しなくてはいけない局面が増えている。それは個人が持つ自由の一面ともいえる。職業や働き方の自由度が高まったからこそ、非正規雇用や歩合制の個人請負などの不安定な仕事が増え、若者が希望を持っていないような問題が起きていく。しかし、自己責任を完全に否定することは、個人の自由を放棄し、他人のいいなりになることを意味する。

自己責任社会で生じた格差や、自分と違う文化や価値観の人を排除するような考え

(左)荻宿俊文教授。  
(右)財団理事長代理として挨拶する事業部長・佐藤梨奈。



2017年12月9日 東京大学 福武ホール

講師：荻宿俊文 青山学院大学社会情報学部教授 / Ph.D. (Ed)

専門は学習コミュニティデザイン論、学習環境デザイン論、教育工学。現在、ワークショップに代表される協動的な学びの場の分析やデザインの実践研究に取り組んでいる。最近は、ワークショップの学校での可能性を追求していくために、芸術表現体験活動と省察活動を組み合わせた授業デザインを地方の小さな規模の学校や地域を舞台に展開している。「青山学院大学社会情報学部ワークショップデザイナー育成プログラム」ではグッドデザイン未来づくり特別賞を受賞、このほかりアルコミュニケーションツールやワークショップデザインでグッドデザイン賞やキッズデザイン賞などを受賞。著書には「ワークショップと学び」(編) [全3巻] (東京大学出版会) など多数。

が広がっているのは、共生社会の限界、挫折を示しているのだろうか。

## ■ 教育には時間がかかる

内山節著『時間についての十二章——哲学における時間の問題——』、その第十章「近代社会の時間」が紹介された。世界で一番民主的だと言われたワイマール憲法を持ったドイツが、なぜナチズムに走ったのか。「近代的個人は、一面では独立し、自律した自由な個人であった。ところがもうひとつの面においては、すべての事柄を自分の責

任で判断し、たった一人の力で社会に立ち向かわなければならぬ裸の個人でもあったのである。」とする。人間は自由の獲得と放棄を繰り返してきている。共生社会の不可能解決を、あきらめることなく教育が引き受けてほしいが、教育は時間がかかることも認識しておく必要がある。

元々教育は社会の問題を考えて解決しようとするもの。学校制度の元を作ったのはコメニウスという17世紀の教育者で、世界初の絵入り教科書には、絵の下に3つの言語でキャプションが入っている。それぞれの言葉で共通の知識を習ったら、戦争を少なくする共通言語が増えるだろうと、世界平和のための教育だったのだ。近代教育で有名なルソーは著書『エミール』で、自然人(自分のため)と社会人(皆のため)を矛盾させない。自分のことも皆のことも大事で、滅私奉公ではだめと言っている。

## ■ 生涯学習が大学を活性化させる

お金を払っている人以外の人が恩恵を受けるのが「正の外部性」。学生以外の一一般の人が生涯学習などで大学にたくさん来てくれれば、大学が活性化され、正の外部性としての価値が生まれてくる。

最後に荻宿氏は「自律性とは一人で完結することではなく、いざというときに頼れる人がたくさんいること。誰かとかを一緒に行う関係性のある時間を持ち、できればさまざまなコミュニケーションに参加することを自分に課したほうがいいと思います」と締めた。